



青谿書院記念館書道会は3月21日に順延です



パフォーマンスの様子 八鹿高校 HPより

※お飲み物無料
 ○七九一六六二三四〇〇
 お問い合わせ 宿南地区自治協議会
 会場 養父市立青谿書院記念館
 交流学習館研修室
 ホーム・ジユース他)

内容一、兵庫県立八鹿高等学校書道部の皆さんと
 書家近藤研秀さんが書道パフォーマンスを披露
 二、席書に挑戦し書き上げた作品、事前提出作品を展示
 三、展示作品の審査・表彰および講評
 お願い
 作品展示の応募は下記申込書を提出して下さい
 ご観覧は申し込み不要です
 切り取り線

日時 令和八年十月八日(土)
 午後一時三〇分 開会
 三月二十一日(土)

青谿書院記念館書道会

2月8日(日)青谿書院記念館交流学習館竣工記念として交流学習館で兵庫県立八鹿高等学校書道部の皆さんによる書道パフォーマンスの実演をしていただく予定でしたが、当日大雪が予想されましたので生徒の皆さん、出席者の安全を考えて前日(7日)に順延を決定しました。

3月21日(土)に開催いたします。

時間は午後1時30分からです。

事前提出、席書挑戦をされる方を再度募集しております。

締め切り

参加申し込み 3月6日(金)

作品事前提出 3月18日(水)

尚、すでに提出していただいている方は提出不要です。

募集チラシの再配布はいたしませんが、たくさんの方の参加をお待ちしております。



青谿書院記念館書道会 参加申込書

地区名	氏名	連絡先
作品提出方法(いずれかを○で囲む 裏面の応募要項をお読みください)		
・当日書き上げる(席書)	・事前に提出する	
備考	受付日	受付No

体育部・文化部・福祉部 各部会開催しました

体育部 1月15日、文化部21日、福祉部28日に各部会を開催し、今年度の振り返りと来年度の事業についての会議を開催しました。1年間お世話になり有り難うございました。

福祉部では今年度計画で3月実施事業についての相談も行いました。(別紙案内チラシ配布いたします)

来年度、体育部の村民号は10月25日(日)行先、淡路島に決定しました。(今年度の村民号実施時のアンケートで希望が多かった)募集時には多くの皆様の参加をお願いします。

各部とも令和8年度の事業について相談しました。

来年度も皆さんと一緒に盛り上げていきましょう。



身边で見られる植物 ⑤6

ロウバイ〈ロウバイ科〉(蠟梅)



庭木など観賞用に植えられていることが多い、身边ではないかも知れませんが、花は葉に先立って冬から早春に咲き、上品で甘い芳香を放つ蠟細工のような花を付けます。漢字で蠟梅と書きますが、梅とは種類が違います。

ロウバイカ（蠟梅花）という生薬としてつぼみが用いられます。が、種子には弱いながらも毒成分が含まれるため要注意です。



お知らせ

2月27日（金）そうあんの里 落語会

申込み締め切り

2月28日（土）ボウリング大会

3月15日（日）そうあんの里 落語会

3月19日（木）宿南小学校卒業式

3月21日（土）青谿書院記念館書道会

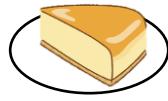
3月24日（火）宿南小学校修了式

喫茶ひまわりからのお知らせ

2月16日（月）19日（木）

おからとココアのケーキを愛心をこめて手作りします。

常連さんも初めての方も、ぜひお越し下さい！お待ちしています。



警報発令時の対応について

ひまわりでは朝の段階で何らかの警報が出ていいる場合は、その後、天気が回復しても、お休みとさせていただきます。

ご了承よろしくお願ひします。



草庵先生紹介



84



「なぜ席を分けるのか」と草庵に抗議する塾生たち

宮崎和夫さん作

豊岡藩では藩士だけでなく、藩主の子息京極武も青谿書院に入塾した。

「(前略) 本日豊岡藩主の世子が入塾される。ついてきた藩士や儒者は25人ほど。にぎやかに雑話、また飲酒もある。しばらくして引き上げる(後略)」(明治4〈1871〉年2月26日)
これは明治時代のことである。まだ廃藩置県の前のことである。豊岡藩は存続していた。

「早起き。講義は『韓文』。授読2人。(中略) 夜になって、塾生としばらくの話し合い。夜は松風洞に場所を移して小酌。夜中まで」(同月27日)

豊岡藩主の世子が入塾した翌日の日記だ。塾生と話し合いと書かれているが、実はこれは青谿書院始まって以来の出来事だったのだ。その日の講義で、草庵は豊岡藩世子を他の塾生とは分けて座らせた。「なぜ席を分けるのか」と塾生が抗議してきた。それから長い話し合いが始まった。各地から来ている藩士たちが中心であった。この時のことを草庵は、和田山で漢学塾「自成軒」を開いていた門人の安積理一郎に手紙で報告している。「(抗議は) もっともなことである。古来学ぶ場は、みんなが同席して学ぶものだ。青谿書院では今までそうしてきた。しかし、その通りに運べぬこともある。私は思慮を重ね、諸事情を考えて決定したことである。意見が合わず、塾生たちの退塾願い出となり、私も自分の信念を曲げてまで引き留めることはしなかった」(山本稔著「和田山町の歴史11安積理一郎の生涯」から)

豊岡藩の世子を特別の席に座らせたことは、各地からやってきた藩士たちには納得できなかった。この時には、江戸時代にあった士農工商の身分差別は一応撤廃されていたが、華族(各藩の藩主等)はまだ存在していた。それに草庵にとっては恩ある豊岡藩主の世子である、等々考えてのことだったのだろう。

この結果、翌日には金沢、阿波、舞鶴、岩国などの藩から来ていた藩士19人が一齊に退塾願いを出して、書院を離れた。夜には若い塾生2、3人逃亡した。時代の流れは、草庵と塾生の師弟の関係にも変化をもたらしていたのだ。書院を出た者たちの何人かは、数日の内にまた青谿書院に帰ってきた。草庵はそれからも、平常どおり講義を続けた。

池田草庵先生に学ぶ会